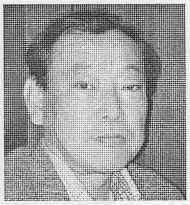
OUMC

大阪大学山岳会 会報
No.7
2005年6月
発　行　大阪大学山岳会
〒565－0871 吹田市山田丘２－１
大阪大学工学研究科建築工学専攻 大野研究室内
ＴＥＬ０６－６８７９－７６３５
ＦＡＸ０６－６８７９－７６３７

山行の活性化さぐる

東京支部長　前澤　祐一

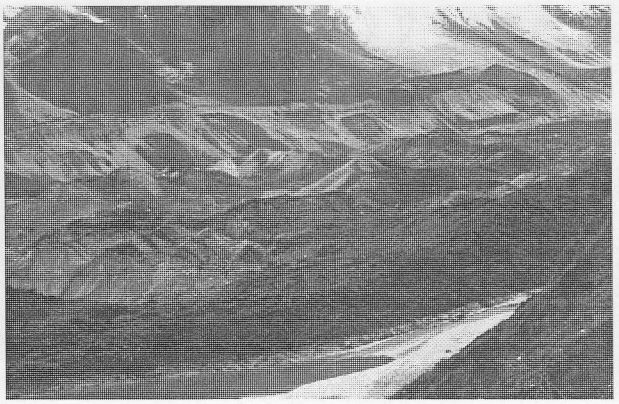
地球温暖化による影響は、目に見える形で表れはじめている。２０００年秋にメモリアルトレッキングで訪れたＰ29ベースキャンプ（ＢＣ）付近でも、ＢＣ直下のプンゲン氷河は大きく後退していた。１９７０年に第４次隊が撮った写真ではＢＣの遙か下流まで続いていた氷河は今や消失し、深いＵ字谷と、幾筋ものモレーンの堤となって我々の行く手を遮った。



一方、温暖化のもう一つの表れである海面上昇も現実問題となりつつある。現在のペースだと、２１００年に最大1㍍、千年で10㍍上昇するとの予測がある。日本は沈没してしまうのか？

「海面上昇シミュレーター」というフリーソフトがあって、インターネットで簡単に入手できる。(http://www6.plala.or.jp/anyoung/sealevel.html)

これを使うと、任意の海面上昇に対して日本列島のどの部分が水没するかが地図上で表示され、それは全体の何％に当たるか、すぐに見ることが出来る。10㍍上昇すると、平野部はほとんど消失する。水没面積率は４・６％であるが、日本の都市は海岸線沿いの平野部にあることが多いので、都市は全滅である。しかし、日本列島の形はあまり変わらない。海面上昇が20㍍、30㍍になると、水没面積率はそれぞれ８・２％、11・３％に増加するが、やはり列島の形は十分に保たれている。



写真説明＝２０００年に撮影したプンゲン氷河の跡。右端上部が第４次隊ＢＣ付近。谷の氷河はすべて消失して幾筋ものモレーンの堤となっている

これを見ていると、つくづく、日本は山国だなあと感じる。狭い国土に１００名山、２００名山があり、日本全国どこでも日帰り、あるいは１、２泊で結構な山に登れる。

２００３年６月、牧野大輔・前東京支部長の葬儀に出席した帰り、副会長の野田憲一郎氏から、後任の支部長をやるよう命ぜられた。会社勤めの時代は、時間的・精神的余裕もなく、山は眺めるだけ。東京支部の集まりにも不熱心で、白馬集会や支部の山行に参加するようになったのは近年になってからのことだ。「不適格」とお断りしたが、「特に何もしなくてよし」とのお言葉で、今までの不熱心の罪滅ぼしと思い、お引き受けした。

東京支部の会員は約70人。北は前橋、宇都宮から、南は三島、東は日立、水戸まで、半径１００㌔程度の広がりがあって、集まるといってもなかなか大変である。今年の新年会は東京近辺の会員が主ではあるが、多数の方が参加され、盛況であった。特に若手の参加が増加したのは大変

喜ばしい。飲み会だけでなく、山行きの方も少し活性化しようと、山行幹事をジャンル別に4人決めて、後押ししてもらうことにした。

最近は、Eメールで簡単に連絡が取れるので、あまり負担をかけないようなやり方でプロモートしてみたいと思っている。大野会長の期待するところの「若手OBの現役サポート」「中高年登山のケア」にも沿えるかと思うが、新しい試みであり、忙しい人たちなので、無理強いは出来ないと思っている。

会員個々では色々と山に入っているようであるが、去年は支部としての山行きが不十分だったので、今年は趣向を変えて、何度か行きたいと思っている。皆さんのご協力をよろしくお願いします。

（1962年工学部卒）

中之島センターを会場に OUMC新年会

本会の05年新年会は2月3日、大阪市北区の歯学部跡に完成した阪大中之島センター9階会議室で開かれ、会員24人が参加した。

同センターは阪大の創立70周年記念に社会貢献の拠点として04年4月にオープンした施設で、本会の新年会で使うのは初めて。センター開設と同じ時期に阪大は国立大学法人に衣替えした。大野義照会長は、開会あいさつの中で、法人化後の現況について「教授ら教官は教員と呼ぶことになったほか、評議会も役員会になった」などと話した。

参加者は次のみなさん（卒業年次順）。

田島汎▽堺谷弘▽山本光二▽三枝禮子▽木村裕一▽杢中勝▽石澤命久▽四方大中▽岡田博司▽坪井和子▽打出英樹▽五百蔵弘典▽佐藤毅▽山本彰三▽梶本孝治▽高田邦雄▽大野義照▽畑中薫▽栗原完治▽山田靖則▽中岡和也▽青木成一郎▽藤井信行▽網野善久

山行幹事を選出 東京支部新年会

東京支部新年会は2月4日、千代田区平河町の料理店で開かれ、22人が参加した。去年は支部としての山行きができなかったので、態勢を整えて活性化すべく次の取り決めをした。

①連絡方式＝葉書で連絡の上、メールで参加呼びかけ②支部名簿を作成する③活動方針＝山行幹事が計画を作成し、呼びかけることにし、幹事4人を選出した。

泊まり山行＝石原敏雄▽歩き山行（日帰り？）＝井上太一▽岩登り山行（日帰り）＝卯城鉄平▽現役応援山行＝光永正樹

参加者は次のみなさん。（50音順）

石原敏雄▽出雲路敬孝▽糸井文彦▽井上太一▽卯城鉄平▽大島輝夫▽兼清喜雄▽上月登喜男▽鷺沢忍▽田中喜樹▽東條公資▽栃尾豪人▽野口明▽野田憲一郎▽樋下重彦▽前澤祐一▽光永正樹▽明神知▽山本信樹▽横尾秀次郎▽米澤成二▽米林外茂男

小人数ながら意気高く 夏の白馬集会

本会恒例の夏の白馬集会は04年8月28日から3日間、長野県白馬村八方のホテル対岳館で開かれた。参加者は途中参加を含めても10人と、近来にない少なさ。それでも会食後の与兵衛倶楽部での歓談は大いに盛り上がった。翌29日は栂池自然園などへ。30日は川中島CCで懇親ゴルフがあった。

出席者は次のみなさん。（卒業年次順）

住吉仙也▽田島汎▽山本光二▽川島勇▽宍戸元▽木村裕一▽岡田博司▽坪井和子▽兼清喜雄▽米澤成二

タクラマカン砂漠徒歩の旅

堺谷弘

2004年3月5日から26日までの22日間、中国とタクラマカン砂漠を旅してきました。主催団体は京都市に本拠を置く「NPOネットワーク大地」で、参加者は全国各地から22人。74歳の私が最年長でした。上海までは大阪南港から上海フェリーの蘇州号で一昼夜の船旅でした（飛行機なら2時間ですが）。玄界灘では、船内の廊下を歩くにもよろめくほどの揺れで、船酔いで翌日は食べ物が喉を通りませんでした。

上海からは列車で西安まで行きました。西安郊外にある秦始皇帝の兵馬俑博物館を訪ねると、兵馬俑を最初に発見したという85～90歳と思われる元農夫が顔を出していて、このおじいさんに兵馬俑の写真集にサインをしてもらいました。さらに列車で酒泉へ行き、酒泉からはゴビ砂漠を東に見ながら車で敦煌まで行きました。

敦煌はシルクロードの入り口です。約100年前に莫高窟で4世紀から11世紀までの仏教経典や古文書、楽器など大量の文化財が見つかり、20世紀における最大の発見の一つとして注目を浴びました。敦煌は近年、観光都市として発展している様子で、マンションが林立し、中心街には商店が目白押しに並んでいます。

3月17日、いよいよタクラマカン砂漠への旅の始まりです。ここからは徒歩の旅で、敦煌から西へ12キロで陽関に着きます。王維が「西のかた陽関を出ずれば」と詩にうたった地で、砂漠の入り口です。1000～1500年前、満月を見ながら酒を酌み交わしたと思われる四阿（あずまや＝亭）、当時の攻城具とされる、綱で引き上げる大きな籠、はしご車などが城外に展示されています。

陽関から北へ進むと、砂漠の中に半ば消え残る漢代の万里の長城に出あいます。北京近くの長城は煉瓦でがっちり構築されていますが、このあたりに残る長城は粘土と草木をつき固めた版築工法によるため、半ば崩れています。

タクラマカン砂漠に足を踏み入れる前、私は「砂漠は死の世界」というイメージを持っていました。西暦400年ごろ、タクラマカン砂漠を訪れた僧法顕は「砂漠の中に熱風あり、あえば忽ち皆死して一つとして全きものなし、上に飛ぶ鳥なく下に獣なし」と書き残しています。ところが、砂漠の中には、数は少ないですが、池あり沼あり、所によっては水があるのです。水の周りには草や灌木が生えています。草のある所には野ウサギが穴を掘って棲んでおり、小指の頭ほどの糞をたびたび目にしました。野生のヤギもいます。

「砂漠の野生動物博物館」があり、カモ、ツルなど渡り鳥の剥製が展示されていました。これら水鳥を捕食するワシ、タカの剥製もありました。ほかに鹿、砂漠ネコ、野生のラクダも棲んでいるのです。砂漠は「死の世界」ではなく、水のある所は「生の世界」でもあることを知りました。

同行したラクダ。随時、乗れるようになっていた

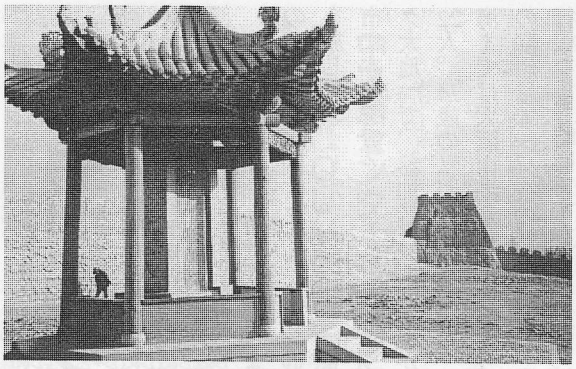
さらに北へ行くと、二屯村という砂漠の中の比較的大きな村に到着しました。ブドウ、麦、野菜を栽培しており、テントを張らず、民家に泊まることができました。無邪気な子供達の歓迎が印象的でした。

砂漠をさらに北へ進み、玉門関に到着しました。陽関と並び称され、かつては漢民族が異民族と対峙した西域攻防の最前線、西域へ通じる重要な関門でした。古来より詩にも詠まれ、唐代の詩人、李白は「漢は下る白登の道、胡はうかがう青海の湾、由来征戦の地、見ず人の帰りあるを」と詠じています。砂漠の南辺を横切る天山南路を経てインドやローマに通ずる道です。629年には玄奘三蔵法師もこの地を通りました。

この玉門関で干しブドウ売りのおばさんに出会いました。1包み400グラムくらいのを10元（150円）と言います。その時、私は財布を持っていなかったので「要らないよ」と言うと、「二つで10元なら、どうですか」と言う。それで、しばらくしてから財布を持って、おばさんの部屋へ行き、「1包み20元でいいよ」とブ

ドウを買い求めました。すると、おばさんは、夕食前の薪割りをしている我々の所へ斧を下げてやって来て、薪をバーン、バーンと割ってくれました。太い木には割れ目を入れて両手で引き裂きます。引き裂けない時、我々の仲間のがっちりした体格の男性と引っ張り合うと、男性が負けて前へよろめきました。身長155㌢くらいの砂漠の女性がこんな馬力を持っていました。きっと純粋で、すぐにお返しをしなければ気のすまない人なのでしょう。

あくる日は玉門関から10㌔ほど東の河倉城へ行きました。唐、漢の時代の軍隊の駐屯地です。武器、弾薬、食料を貯蔵する兵站地でしたが、往時の建物の屋根は崩落し、粘土造りの壁だけが残っていました。



陽関の四阿

玉門関に戻り、翌日は西方約30㌔の鬼城を訪れました。ここの地形はウイグル語でヤルダン（「険しい土丘群のある地」の意味）と呼ばれています。粘板岩が水蝕、風蝕で削られてできた様々な形の土丘が、幅2㌔、長さ25㌔にわたって連なり、見事な造形美に圧倒されます。鬼城という地名は、その昔、ここで露営した旅人が、夜中に土堆群を吹き抜ける風の音が鬼の声に聞こえたことで、そう呼ぶようになったそうです。

「獅身人面」と彫られた石碑が目につきます。石碑の向こうにはスフインクスとピラミッドにそっくりの土堆が見えます。この風景を見て、中国人もエジプトのスフインクスとピラミッドを思い浮かべるでしょう。

「艦隊出海」と彫られた石碑もありました。中国語の辞書を引くと「艦隊出港」という意味です。砂の海の中に軍船を思わせる土堆が並んでいます。まさに艦隊が舷々相摩して出港しようとしている様を思わせます。

万葉集にも、このような情景を詠んだ額田王の歌があります。

「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」

百済からの援軍要請に応え、斉明天皇が朝鮮半島へ出兵する途次、今の愛媛県松山市の道後温泉近くで潮待ちのため船泊まりしたあと、いよいよ西へ向かって出港しようとする時の情景を歌ったとされます。土堆群が砂漠の中に並列するシーンを見て、中国人も額田王と同じ艦隊出航のイメージを抱いたのだろうと思いました。

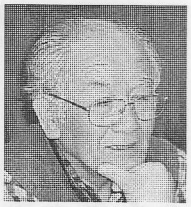
鬼城からは車で東の敦煌へ。夜はテント泊まりの8日間の徒歩の旅を終えました。

（1953年理学部卒）

タスマニア島を訪ねて

鷺沢　忍

2003年11月から12月にかけてオーストラリア南東の島、タスマニアに出かけた。観光旅行ついでにハイキングを数日しただけで、山岳人にとって魅力的な山があるとは言えないが、自然に優しい、高年者向きの山歩きを体験できる島として紹介したい。



タスマニアはオーストラリア最大の島で、九州と四国を合わせたほどの大きさ。約40万人が南部と北部に集中して住み、西半分の温帯雨林を中心に17もの国立公園がある。隣のニュージーランド（NZ）に似ているとされるが、山歩きから見ると、大きく異なる。マウントクック（3252㍍）はじめ雪と氷河の景観が美しいNZと違って、タスマニアは比較的低い山が散在し、森林が島全体を覆っている。このためブッシュウォーキングがメインである。登山道や小屋の整備も十分でなく、何日もかかる縦走では食料、テントなど重装備を覚悟しなければならない。

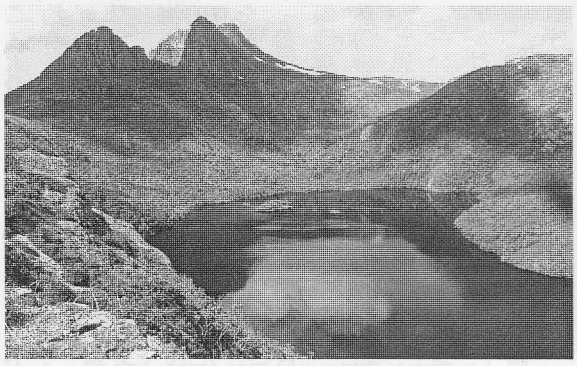
私とタスマニアとのかかわりは20年余り前に水力発電所建設で訪れたことから。豊かな自然と厚い人情に魅せられて、時間が取れるようになったら再訪しようと決めていた。前半は南オーストラリア各地のツアーに参加。家内を帰国させた後、私のみタスマニアのロンセストンに飛んだ。

タスマニアでは自前の移動手段が必須である。ロンセストンでは空港で借りたレンタカーで国立公園のドライブと渓谷のハイキングを楽しんだ後、クレードルマウンテンへ向かう。薄暗くなってから飛び込んだ宿

はユースホステルが経営するコテージ。自炊の用意をしていなかったので、マネージハウスにあった僅かな材料で夕食と翌日の朝食、弁当を作るのに苦労した。翌朝見ると、何と向かいの小空港の建物にレストランがあるではないか。ちゃんとした地図を用意しなかった報いだ。ユースから2キロで公園入り口に着き、観光バスが止まる立派なホテルがあった。さらに7キロ走った公園管理事務所で地図を入手し、お薦めのコースを教えてもらう。

公園に入るには車は1日20豪ドル、人は10豪ドル払うが、駐車場などの施設を考えると高くない。3キロ先のダブ湖に駐車場があり、ここが歩きのスタート点だ。タスマニアを象徴するクレードルマウンテン（1545メートル）の写真はここから撮ったのが一番よい構図だ。ダブ湖を前景として右正面に槍ケ岳様のピーク、その左に馬の背のような尾根が続く。ほとんどの観光客は難易度2のダブ湖1周コースをとる。私は難易度4のハンソンズピークからクレードルマウンテンの中腹をたどり、頂上への分岐点で頂上に向かうかどうか決めるコースにする。

駐車場からハンソンズピークまでは潅木やツツジの茂る明るい道を標高差300メートルほど登る。休憩していると多国人混成の団体がやって来て、会話の中で日本名を呼ばれる人がいた。語学留学でメルボルンに来ていて、現地ツアーに参加したとのことだ。山頂への分岐点に至ると、みぞれが降り出し、雨に変わる。タスマニアの天気は1日に四季があると言われるほど変化が速く、大きい。幸いというべきか、これで登頂を諦め、高原を横断する。森林限界の湿原で、苔と小さな水溜りの間を楽しく歩く。このあたりは有名なトレッキングコース、オーバーランドトラックの道筋で、重装備の若者とすれ違う。雨中、リラ湖を経て、駐車場に戻る。所要時間は公称の4～6時間に対して写真を撮りながらで6時間だった。



クレードルマウンテンとダブ湖

その日もユース泊まり。

翌日は鉱山町クィーンズタウンに泊まり、セントクレア湖までのリエル街道を鉱山跡、ネルソン瀧、氷河痕などを見ながら走る。途中で車を降り、山道を30分歩いて、フランス兵の帽子の形で有名な山、フレンチマンキャップを遠望した。

セントクレア湖の公園管理事務所に着いたのは午後5時を過ぎ、閉まっていた。幸い、隣のレストランは開いており、親切な女性がコースの相談に乗ってくれ、翌日の渡し船の予約も引き受けてくれた。この日の宿は20キロ離れたブロンテパーク。戦前の水力発電会社の工事用宿舎が払い下げられたもので、周りに当時のバンガローや機械類が展示してあり、かつて同じ仕事をした者として面白かった。夕食は粗食の反動でウォンバットのステーキを美味しく頂いた。

セントクレア湖は島のほぼ中央にあり、箱根の芦ノ湖のように山と森に囲まれている。前述のトレッキングコースの終点でもある。人工物は湖南端の事務所と北端の波止場、無人の山小屋だけで、観光拠点から遠いこともあって、静かな環境が魅力。反対側の湖尻に向かう渡し船に乗ったのは中年女性2人と私だけで、中間点で3人とも降りて歩きが始まる。湖岸の道は苔と羊歯に覆われて見通しが悪いが、道を外れて岸に出ると、狭いがきれいな砂浜と随所に小川があり、2キロ先の対岸には標高差300メートルぐらいの連山が見られる桃源郷だ。

問題は林間歩行時のルートファインディングの難しさだった。オーストラリア、ことにタスマニアは自然保護に熱心で、倒木は放置して朽ち果てさせる主義だ。道を遮る巨木でも通る部分のみカットするか、カットもしないままだ。日本では木が道を遮っている時は、この先へ行っては駄目との標識代わりだから、最初は戸惑った。倒木の多さ、苔道、踏み跡の少なさなどが重なり、木のすき間からルートを探るという貴重な体験だった。

女性2人は慣れているせいか、写真を撮る私が遅いのか、はるかに先行したようだ。のんびり楽しんで湖尻のナルシス桟橋に着いたのは一つ前の船便に十分間に合う時間だった。それに乗って早く帰れると思ったら、予約していたトレッカーが船の出発直前にどかどかと到着し、私だけ残される。次の最終便まで新緑の林の向こうの山並みを眺めたり、珍しい植物を落ち着いて眺めたり、桟橋での昼寝などはいい思い出となった。

旅の目的の一つにゴードン湖を見ることがあった。かつて発電所のトラブル調査で訪れた所で、湖と山並

みが素晴らしく、タスマニアでも秘境といわれる所だ。途中のマウントフィールド国立公園にも立ち寄り、公園事務所お薦めの高原まで足を伸ばす。ドブソン湖で車を降り、スキー場を過ぎ、森林限界を越えて沢山の湖を見下ろしながらKコルまで登る。お薦め通りの景観で大満足。事務所横のレストランで珍しくカレーライスがあったので注文する。味は日本と一緒で、肉いっぱいのステーキカレーだった。

食後、100キロ走ってゴードン湖ダムに到着。前は忙しくて見られなかったのが今回やっと実現した。両岸が迫った峡谷に建設された、落差は大きいが幅の狭い小さなダムで、1千平方キロもの人工湖ができた効率のよさにびっくり。その夜はかつて2回泊まったペダー湖のホテルへ。ここも電力会社の宿舎だったのが、釣り客向けのホテルとなっている。

この後の旅は平原の古い町、遺跡(と言っても19世紀のもの)、二つの海洋国立公園、ホバート市を訪れた。10日で2151キロ走行、7国立公園を巡る旅だった。

参考までにオーストラリアの自然保護運動についてあえて言えば、自然保護を楽しむか、自慢しているのかと思えるぐらい積極的だ。

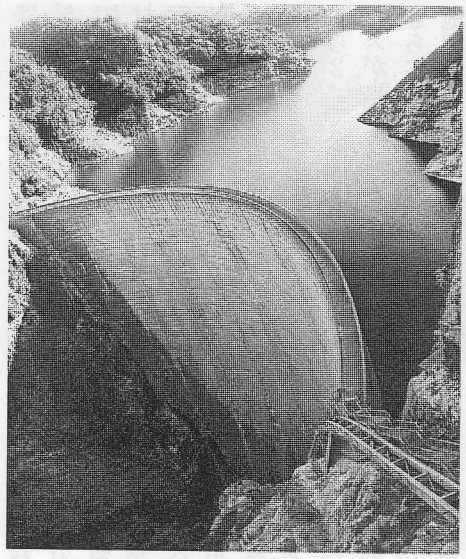
一、キャンプ場は焚き火禁止で、アルコール系のコンロしか使えない。

二、公園でのバーベキューは備えつけの電熱器だけが使える。

三、公園の植物の多い所では人に踏まれないように桟道とし、踏まれて土が露出した部分には植物繊維を粗く編んだ布を張って植物の再生を図っている。至る所で苗木も植えている。

四、公園の入り口には、ここで用を足して公園内で排便しないようにとの掲示がある。さらに公園内の便所は便の処理が容易なように櫓の上にあり、排便後におがくずを撒いて発酵を促すようにとの掲示がある。

(1956年工学部卒)



ゴードンダム

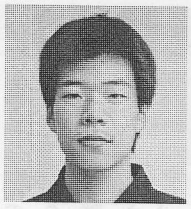
大阪大学山岳部活動報告

2004年度

リーダー所感

藤井　信行

2004年度は部員不足に加えて新入部員の確保も思うようにいかない1年であったが、多数のOBに手助けしてもらいながら活動を続けることができた。今改めてOB諸氏に感謝申し上げたい。



3月の春山合宿は、神岡新道経由で薬師岳を往復した。登頂日に天候が崩れ始めたのが残念であったが、自分たち以外に登山者はおらず、開放感があった。1年生にとってはコンパスワークの勉強になったと思う。

5月の新人歓迎合宿は、新1年生のいない現役とOBで劔沢にベースキャンプを張った。入山から下山まで晴天が持続し、雪上訓練ならびに劔岳、立山三山、奥大日岳を存分に楽しむことができた。

8月の夏山定着合宿は、夏期休暇期間の変更に伴い、例年より遅い時期の実施となった。滝谷クラック尾根は支点作成やルートファインディングに課題を残した。雨のせいで計画の前半分しか実行できなかったが、逆に雨の中の行動で学ぶものも多くあったように思う。

その後、南アルプスを三伏峠から荒川前岳、赤石岳と縦走した。台風接近の影響で入山から予定変更を余儀なくされ、小雨の中の行動となったが、北アルプスとは違う、南アルプス独特の感があった。荒川小屋からの雨上がりの富士山が美しかった。

9月には網野が個人山行として上高地から親不知まで単独で縦走した。網野にとっては自分の限界を試すよき機会となった。幸い、台風は一つも来なかった。

10月は網野と本多が夏の反省を兼ねて北アルプス錫杖岳に入った。11月の偵察合宿は現役のみで取り組んだが、力量不足は否めず、御岳アイゼン合宿での仕切り直しとなった。

12月、蓬莱峡の岩場での練り歩き中にリーダーの自分が転落事故を起こしてしまい、冬山には行けなくなった。注意力が散漫になっていたと反省している。後遺症のないのは不

幸中の幸いであったが、自分自身の山に対する、また山以外のことに対しても、考え方を少し変えさせられた気がする。新リーダーの網野は、部員の数という点では厳しい環境にあるが、これまでの経験をもとに、自分の思うことを積極的におこなってほしい。

◆春山合宿／神岡新道経由薬師岳

［期間］3月20日～23日

［メンバー］藤井（2年、CL）、網野（1年、SL）、大場（1年）、光永（OB）

20日（曇り）打保集落（8・40）―千の沢分岐（10・30）―水の平（13・00）―神岡・飛越分岐（14・30）―避難小屋手前（17・00）

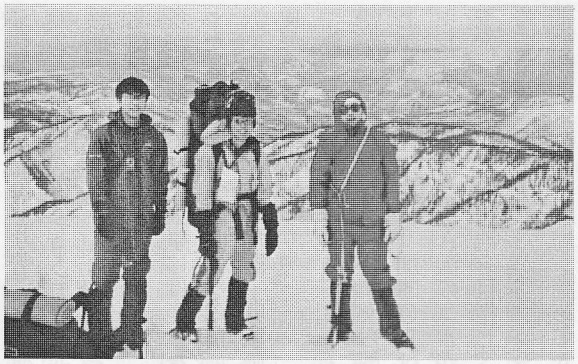
打保集落からしばらく続く林道は積雪がしまっていて、歩きやすい。雪の状態と、周りが樹林帯であることを考慮して、夏道である沢を詰める。水の平手前の稜線上に出るところで、藤井が沢にテントマットを落としてしまう。分岐から避難小屋を目指すが、見つからず、小屋手前でテントを張った。

21日（快晴）北ノ俣岳・神岡分岐（8・30）―太郎平小屋（10・20）―薬師峠（10・40）―薬師平（11・40）―薬師岳山荘（13・30）

予報通りの晴天で、風はほとんどなく、暑すぎるくらい。分岐からは槍ケ岳や薬師の裏に剱岳を見ることができた。山荘までは時間的に十分な余裕をもって着くことができた。

22日（曇りのち雪）薬師岳山荘（5・30）―薬師岳頂上（6・20）―太郎平小屋（8・50～11・00）―北ノ俣岳・神岡分岐（14・00）―テント設営（15・00）

朝から曇り空。視界は十分だったが、頂上手前から雪がちらつき始め、少し心配になった。頂上を往復し、山荘でテントを撤収、出発しようとする頃から天候が悪化する。太郎平小屋手前でホワイトアウトに近い状態となり、小屋に一時避難する。天気図を書くと、弱い西高東低であったが、翌日以後の天候や行動時間などを考え、避難小屋目指して進むことにする。分岐から別の尾根を下ってしまったが、翌朝、正しいルートまで戻ることにした。テント設営後、雪が激しく降り出し、かなりの新雪が積もりそうであった。



春山合宿　神岡・北ノ股分岐直下で

23日（晴）神岡新道稜線（7・45）―神岡・飛越分岐（10・00）―水の平（10・30）―打保集落（13・15）

明るくなるまで待機して南東方向へトラバースする。時間とともにガスも消え始め、往路に打った赤旗のおかげで神岡新道稜線を確認することができた。ガスが晴れた後は快晴となり、快適に下った。

◆新歓合宿／剱・立山

［期間］4月30日～5月3日

［メンバー］藤井（3年、CL）、網野（2年、SL）、大場（2年）、寺田（OB）、溝西（OB）

30日（快晴）室堂（7・50）―雷鳥沢（9・00）―剱沢（11・10）

雲ひとつない快晴で、日射しも非常に強い。雪の大谷を見て、例年より積雪量は少ないかな、と感じる。雷鳥沢には多くのパーティーがテントを張っていたが、剱沢は5、6パーティーと少ない。早く着いたので、近くの斜面で雪訓をした。

1日（快晴）剱沢（5・20）―別山（6・20）―雄山（8・50）―別山（10・30）

雄山往復の遠足をして、帰りの別山付近で雪訓をした。午後、溝西OBが合流する。

2日（快晴）

【藤井、網野、寺田】剱岳往復

剱沢（4・20）―前剱頂上（5・45）―平蔵の避難小屋（6・10）―剱岳頂上（6・40）―前剱頂上（7・40）―剱沢（8・50）

前日までに登った人たちの踏み跡がしっかりと残っていた。前剱の登りはアイゼンの刃もよく刺さり、ロープは出さなかった。合計4時間半で、当初の予定よりは約2時間速い行動となった。

【大場、溝西】奥大日岳往復

剱沢（5・00）―新室堂乗越手前（6・00）―奥大日岳頂上（7・20）―雷鳥沢（9・00）―剱沢（13・30）

2時間余りの速いペースで奥大日岳に行くことができた。絶好の天気の下で初夏の雪山を楽しむことができた。

3日（曇りのち晴）剱沢（6・45）―別山乗越（7・20）―室堂（8・50）

雨は降っていないが、ガスで視界は悪い。雷鳥沢に下りると、すっかり晴れ上がった。当初の予定とは随分変わってしまったが、この日は下

山のみとすることにした。

◆夏期定着合宿／穂高・涸沢

［期間］8月12日～19日
［メンバー］藤井（3年、CL）、網野（2年、SL）、本多（1年）、寺田（OB）、加門（OB）、卯城（OB）

12日（快晴）上高地（6・00）―横尾（9・15）―本谷橋（10・45）―涸沢（13・30）

快晴で日差しは強いが、ほぼ予定通りのコースタイムで到着できた。猛暑と時期が遅いせいか、雪渓はあまり残っていなかった。

13日（快晴）涸沢（6・00）―前穂北尾根Ⅲ・Ⅳのコル下で雪訓（歩行、ザイルワーク）―Ⅲ・Ⅳのコル（10・30）―涸沢（13・15）

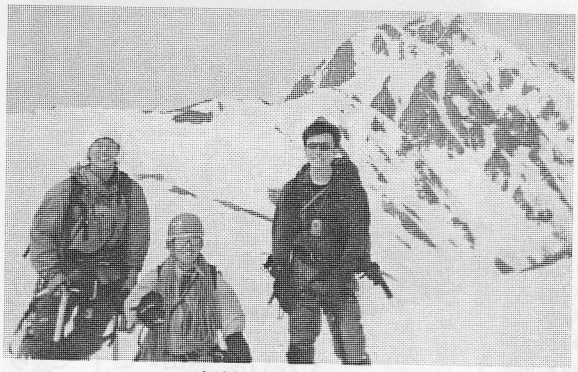
雪訓は歩行訓練と、積雪期を想定した確保技術を中心にした。その後、Ⅲ・Ⅳのコルから Ⅳ峰、Ⅴ峰を越え、Ⅴ・Ⅵのコルまで北尾根を下った。

14日（晴のち曇り）涸沢（4・20）―南稜クサリ場との分岐（5・00）―ゴジラの背の基部（5・50）―東稜コル（7・20）―北穂小屋（7・50）―涸沢（10・00）

天気が悪くなりそうなので、できるだけ早く行動するよう努める。取付で最低コルより上部に出てしまったが、ガレ場からルンゼを詰め、ゴジラの背の基部に辿り着いた。核心で2人1組に分かれて1ピッチだけ、懸垂ポイントまでザイルを出した。北穂手前で、つかんだ岩が崩れ、本多が滑落するも、大事には至らなかった。なんとか大降りになる前に涸沢に戻った。夕方、加門、卯城両OBが合流する。

15日（雨のち晴）寺田OB下山。朝から雨だったが、9時頃から雨は上がり、藤井、本多、加門OBは大キレットに向かう。A沢のコルから予定を変更して北穂池を目指し、2時間ほど探索してみたが、ブッシュ帯に妨げられる。結局、諦めてA沢のコルから元来た道を戻る。

16日（晴）



新歓合宿　剱沢で

【藤井、網野、本多】滝谷クラック尾根

B沢入口から約1時間半で赤茶のバンドに着く。後から思えば、ここの下りに慎重になり過ぎたような気がする。懸垂ポイントが見当たらず、途中から合流するような形で正しいルートに乗った。リードは藤井と網野が数ピッチごとに交代で行う。最後のピッチで恐らくルートを間違えたために大幅な時間ロスをしてしまう。支点作成やルートファインディングが反省点として残った。

【加門、卯城両OB】東壁ルンゼ

17日（雨）停滞。加門OBが下山。

18日（雨）涸沢（8・30）―穂高小屋（9・45）―涸沢（13・00）

小雨のなか、奥穂を目指す。しかし、穂高小屋より上は予想を上回る強風で足下も悪く、引き返す。夜は涸沢小屋近くでビバーク訓練をした。

19日（晴）涸沢（6・30）―本谷橋（7・40）―横尾（8・40）―上高地

台風接近のため、予定より1日早く下山する。しかし、涸沢も上高地もすっかり晴れていた。

◆夏期縦走合宿／南アルプス荒川三山～赤石岳

［期間］8月28日～30日
［メンバー］藤井（3年、CL）、網野（2年、SL）、本多（1年）

28日（曇り）豊口山登山口（8・30）―三伏峠（10・40）―烏帽子岳（11・25）―小河内岳（13・10）―高山裏避難小屋（16・30）

台風接近のため、当初の塩川経由を変更して鳥倉林道経由とする。三伏峠から急にガスが出てきて視界が悪くなる。全体としてコースタイム9時間半のところを8時間で行くことができたが、高山裏避難小屋に着いたのは午後4時半頃であった。

29日（小雨）高山裏避難小屋（5・00）―荒川前岳（7・40）―荒川小屋（8・50）

樹林帯を抜け、主稜線に出ると、雨と風が一層強くなった。荒れる天候のため、荒川三山は前岳までとし、分岐から荒川小屋を目指した。

30日（小雨）荒川小屋（4・30）―赤石岳（6・20）―赤石小屋（8・20）―椹島（11・20）

最初は視界良好で、快適な道程を行く。大聖寺平を過ぎた辺りからガスがかかったり晴れたりの繰り返し。赤石小屋との分岐にザックをデポして赤石岳をピストン。赤石岳頂上でガスが晴れるのをしばらく待ってみたが、諦める。雨の中の樹林を下り、途中、目の前に落石があり、ヒヤッとする場面もあった。椹島は視界に入ってからが結構遠かった。

◆個人山行／北アルプス槍ケ岳～親不知縦走

［期間］9月16日～26日

［メンバー］網野善久（2年）

16日（晴）上高地（6・30）―横尾（9・20）―槍沢ロッジ（11・20）―槍岳山荘（16・00）

好天にもかかわらず、ザックが重く、予想以上に体力が消耗する。翌日からの天候が心配になる。

17日（雨）槍岳山荘（5・20）―双六山荘（8・40）―双六岳（10・20）―三俣蓮華岳（11・30）―三俣山荘（12・10）

朝からガスで、槍のピストンは中止に。西鎌以後はほとんどハイキングであった。

18日（雨）三俣山荘（5・10）―鷲羽岳（6・30）―水晶岳（8・30）―真砂岳分岐（11・00）―野口五郎小屋（12・00）―烏帽子小屋（15・00）

コースタイムを大幅にオーバー。翌日の13時間行動をどうするか再考し、結局、2日に分けることにした。

19日（雨のち晴）烏帽子小屋（5・30）―烏帽子岳（6・20）―船窪岳テント場（14・30）

寒冷前線通過のせいであろう、朝から天気が悪い。コースタイムをオーバーし、やはり13時間行動はやめて正解だったようだ。

20日（晴）船窪岳テント場（6・00）―蓮華岳（10・20）―針ノ木小屋（11・00）

予想通りの好天。半日行動で残りの時間は休養と物干し。明日からまた頑張ろう、と意気込む。

21日（晴）針ノ木小屋（4・30）―針ノ木岳（5・15）―赤沢岳（7・30）―種池山荘（10・45）―冷池山荘（12・45）

10時間のコースタイムのところを8時間で歩けた。ザックも軽くなってきたし、水も少なかったからであろう。前線を伴った低気圧が接近中で、天候が少し心配となる。

22日（雨）冷池山荘（4・30）―キレット小屋（9・00）―五竜岳（12・15）―五竜山荘（13・15）

朝から雨。鹿島槍・五竜間は雨に濡れていやらしいが、むしろテンションが上がり、緊張感が心地よい。すれ違う人もおらず、八峰キレットから五竜間の凄みのある景観を独り占めできて最高だった。天気が悪いゆえに余計に迫力を感じた。

23日（雨のち晴）五竜山荘（4・30）―唐松小屋（6・30）―天狗山荘（11・20）―白馬村営宿舎（14・30）

唐松岳に着くと、幸運にも次第に天候は回復に向かった。雨の中の不帰にはならなかった。不帰・天狗の大下りは地図では危険地帯になっているが、個人的には、五竜・蓮華の大下りのほうが危険だと思った。ついに白馬まで来て、日本海が見え、思わず叫んでしまった。

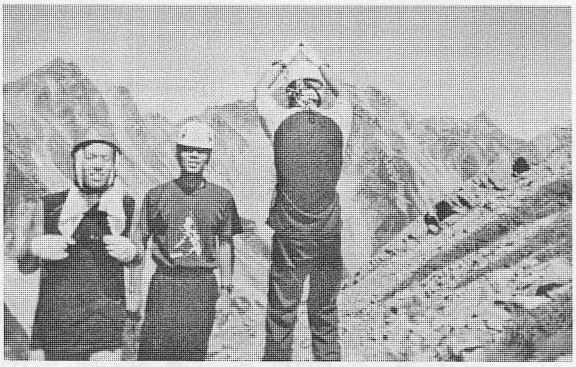
24日（晴）白馬村営宿舎（6・10）―白馬岳山頂（6・35）―雪倉岳（8・45）―朝日小屋（12・45）

雪倉岳からは樹林帯が続く。展望は開けないし、高度を稼いでいる実感がわかない。

25日（曇り）朝日小屋（6・00）―朝日岳（6・50）―栂海山荘（13・40）

栂海新道は平坦な樹林帯を歩き続けなくてはならず、しんどい。コースタイムは若干厳しいのではないかと思った。翌日は下山のみということで、食料を3日分ほど食べた。

26日（曇り）栂海山荘（5・40）―白鳥小屋（8・30）―尻高山（10・50）―親不知海岸（13・00）



夏山合宿　前穂北尾根Ⅲ・Ⅳのコルで

◆錫杖岳アルパインクライミング合宿

［期間］10月16日～17日

［メンバー］網野（2年、CL）、本多（1年、SL）

16日（晴）登山口（8・30）―錫杖沢出合（10・00）―左方カンテ取付（11・30）―錫杖沢出合（12・30）

予定より1時間以上早く登山口に到着する。錫杖沢をつめて、錫杖沢の岩舎に向かうが、見つけることができず、左方カンテ取付に出てしまう。この日は3ルンゼを登る予定であったが、断念する。

17日（晴）左方カンテ取付（6・15）―登攀開始（6・30）―登攀終了（9・05）―取付（10・45）―登山口（13・20）

予想以上に速い3時間弱で左方カンテを終了。5P、6Pは快適なフリークライミング。最終ピッチは省いて懸垂に入るが、ここに時間をかけすぎてしまう。先行パーティーがいたものの、本番の雰囲気を味わえたのはよかった。次の夏もここに来たいと思った。

◆春山偵察合宿／中央アルプス木曽駒ケ岳～宝剣岳～空木岳

［期間］11月2日～4日

［メンバー］網野（2年、CL）、本多（1年、SL）

2日（晴のち曇り）登山口（9・00）―金懸小屋（11・40）―七合目（14・00）―玉の窪小屋（16・00）

登山口から八合目までテント場は至るところにある。見晴らしがよく、危険個所は特にない。八合目から前岳はルートファインディングによってはロープが必要になるかもしれないが、夏道沿いに行けばよいであろう。前岳の登りに差しかかるとき、トラバース道に入らぬこと。玉の窪小屋は風をよけてテントを張れる。

3日（晴）玉の窪小屋（4・00）―宝剣山荘（5・50）―檜尾岳（10・55）―熊沢岳（12・45）―木曽殿小屋（14・30）

玉の窪を出て、すぐに木曽駒への登りに入る。本番では途中、ロープが必要かもしれない。宝剣北稜は夏道沿いに行くべきか、稜線沿いに行くべきか検討する。濁沢大峰2峰目、3峰目、熊沢岳、東沢岳の上りもロープが必要になるだろう。

4日（晴）木曽殿小屋（5・30）―空木岳（7・15）―駒峰ヒュッテ（7・30）―池山（11・45）―登山口（13・30）

空木岳は、第1、第2、第3ピークともロープが要りそうだ。駒峰ヒュッテはきれいで、土間が使える。池山尾根は思わぬところでロープが必要になりそう。池山避難小屋はガラス張りで非常にきれいだった。

◆冬山偵察合宿／池山吊尾根往復南アルプス北岳

［期間］11月5日～6日

［メンバー］藤井（3年、CL）、網野（2年、SL）、本多（1年）

5日（晴）夜叉神ゲート（5・50）―鷲ノ住登山口（8・40）―吊尾根登山口（10・40）―池山小屋（14・40）

登山口を行き過ぎたために約2時間のタイムロスをしてしまう。林道の所々に長いトンネルがあり、昼間からヘッドランプを出すはめに。吊尾根登山口から急登が始まり、水6㌔の荷でかなりエネルギーを消耗させられた。夕方の話し合いの結果、翌日下山とする。

6日（晴）池山小屋（7・00）―吊尾根登山口（8・30）―鷲ノ住登山口（11・00）―夜叉神ゲート（12・10）

スリップなどしないよう、慎重に下った。野呂川への下りはロープを出し、懸垂下降した。

御岳アイゼン合宿　剣ケ峰で

◆御岳アイゼン合宿

［期間］11月19日～23日

［メンバー］藤井（3年、CL）、網野（2年、SL）、本多（1年）、青木（監督）

19日（小雨）八海山荘（6・00）―田ノ原山荘（7・50）―九合目（10・50）―王滝頂上（12・30）

小雨で視界はあまり良くない。田ノ原に着くと、雨が少し強くなる。夏道が隠れるくらいの積雪は九合目からであった。翌日の後発隊の行動を考慮して王滝頂上に設営する。

20日（晴）王滝頂上（6・15）―剣ケ峰（6・40）―二ノ池周辺で雪上訓練（7・30～12・00、歩行訓練、滑落停止、FIX通過、コンティニュアス）―王滝頂上（13・00）

本多と青木監督が午後3時、王滝頂上に到着する。王滝頂上にて藤井、網野、本多がビバーク訓練をした（19・30～3・30）。頂上だけに今までにない厳しさであった。

21日（晴のち曇り）王滝頂上（6・00）―剣ケ峰（6・30）―二ノ池周辺で雪上訓練（7・30～10・30）

4人での行動は10時半で終了し、藤井と青木監督が下山。その後、ガスに包まれ、雪・風も加わり、テントで停滞。ラジオ・天気図の入った装備袋を忘れたために、翌日以降は慎重に行動することとする。日が暮れても回復の兆しがなく、アイゼン、ピッケルなどをわかるところに置き、テントの周囲の雪を掘り、なるべく埋まらないようにした。

22日（快晴）雪上訓練（7・00～9・30）―摩利支天山（11・00）―雪上訓練（13・00～14・30）

前日の天気がうそのように晴れた。雪訓を挟んで摩利支天山をアタックする。午後、二ノ池で再び雪訓を行うが、ガスが出てきたので撤収。

23日（快晴）二ノ池（5・30）―剣ケ峰（6・00）―田ノ原（7・45）―八海山荘（8・30）

下山予定日を迎えたうえ、天気図も書けないので、一目散に下山することにした。それにしても3時間で下山とは。（文責・藤井信行）

会員の近況

（白馬集会と新年会の出欠はがきなどから抜粋しました。その後の変動などは未確認。卒業年次順。敬称略）

加藤　幹太（理27）先日、喜寿を迎えました。昔歩いた山のことを時折思い出しています。しかし、友人が少なくなっていくことは辛いものです。低い山なら、まだ登れると思っていますが、古社寺などを訪れることが多くなりました。

久保　三朗（工27）1月4～7日、ニセコへ行きました。それまでの暖冬から一転、寒くなった時でした。滑る方はまあ不足はなかったが、雪空、曇り空の連続で、羊蹄山は勿論、ニセコも一度も望めず。やはり山が見えないのは淋しいです。2月にはコルチナへのつもりです。ということで元気にはしておりますが、寄る年波には抗し難しの思い切なりです。

二木　節夫（工29）家内の体調が依然として回復せず、家事の大半を小生がやっています。しかし、小生の体調は良く、時には山に登りますし、ゴルフもしますし、碁も楽しんでいます。

濱　一枝（薬30）もっぱら平地を歩いております。加古川ツーデーマーチに参加して2日間10キロずつ、計20キロを完歩しました。相変わらず点訳ボランティアを続けています。

高木　俊夫（理31）昨秋、スイスのエンガディン地方とイタリアのドロミテ地方を20日間、ドライビング・トレッキング致しました。幸い、この程度の無理はできる健康状態を保っております。エンガディンはスイスの奥地で、比較的静かな地域でした。山と絵に関心をお持ちの方なら、アルプスの画家セガンチーニが描きまくった地域としてご存知でしょう。ドロミテは余りにも有名です。ガードレールもない山道の右側を走ることは、この歳の人間にはストレスです。その効果でしょうか、この2年間、左肩に感じていた表面性の神経痛が完治してしまいました。

横井　保枝（文31）昨年夏、交通事故でケガをし、しばらく山を歩けませんでした。やっと良くなり、そろそろスキーに出かけます。

辻川　眞（経32）今年の年賀状に「ホームページを開いた」と記したところ、大勢の方から「見たぞ」と返事をいただいた。HPの主な内容は「絵」「ガーデニング」「山とスキー」「自分史」＝**写真**は表紙。一昨年春から札幌のマンションを借りて長期滞在を始めたのも、本当の雪質の中で楽しむスキーの醍醐味を知ってしまったからです。70の坂を越えて、まだ毎日でも滑りを望み、60代半ばの連れ合いがいまだにスキー検定1級に挑戦中の狂いぞまです。

蝦夷地の山容はおおらかで、人は少なく、花は豊か。困るのは米国・加州と異なり、こちらの熊達の無遠慮さ。私達は、山道の曲がり角ごとに怯える始末です。これさえなければ天国極楽なのですが。

（編者から＝辻川さんのHP検索はYAHOOでタイトル「時遊自彩」を入力すればOK）

梶本　孝治（工38）阪神大震災から満10年になりますが、神戸に住む毎日はただただ幸せの一言に尽きます。残りの人生をこの神戸で、神戸のために仕事をできればと思っています。昨年はあまり山らしい山へは行けませんでしたが、我が裏庭のような六甲、摩耶山周辺は四季を通じて歩いてきました。今年は少し現役の諸君のトレーニングにお付き合いできればなどと思っていますが、邪魔になるかなあ？

宇野　雅明（医39）町医者（耳鼻科）を続けながら、近くの里山や社寺めぐりなどを楽しんでいます。

大川　和秋（工39）中学時代に南紀の果無山脈を舞台にした吉川英治の小説を読み、「秘境」として残してきました。熊野古道と重複し、観光化されつつあるようですが、踏破する予定です。昨年12月初め、幼少の折に育った姫路の広峰山、増位山の連なりを確かめ、広峰山にあった昔からの小集落がほぼなくなったことを確かめてきました。

木原　秀幸（工39）昨年12月で勤めを辞め、フリーになりました。これからは好きなことを好きな時にしたいと思っています。1月には札幌の辻川ご夫婦とルスツでスキーを楽しみました。ご夫婦もお元気で、北海道の生活をエンジョイされているようです。楽しい計画があれば、ご一緒させて下さい。

高田　邦雄（経40）昨年4月、和歌山県有田市から奈良の自宅近くの王寺支局勤務に戻ったのも束の間、8月に心臓疾患で冠状動脈バイパス手術を受ける羽目に。術後の経過は順調ですが、ストレスは体に良くないので、3月末で新聞記者を卒業しました。

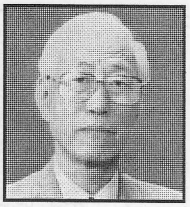
大野　義照（工42）2月の武奈ケ岳、5月連休の白山と、雪山の素晴らしさを再認識した1年でした。夏には初めて南アルプス南部（荒川三山、赤石岳）を訪ねました。

黒田　治朗（医44）昨年、還暦を迎えました。体のあちこちに不調を感じます。なるべく車を使わず、歩くことが健康法です。ゴルフもシニアの領域に入りましたが、いまだ上昇すべく頑張っています。

上松　一雄（工50）平成17年には今いる会社をそろそろ去って他社に移ることになりそうです。心機一転また頑張るべく、体力、学力増強に励んでおります。

追悼

難波　恒雄氏（本会会員・富山医科薬科大名誉教授）2004年7月24日、多臓器不全のため死去、72歳。1954年阪大薬学部卒。山岳部出身ではなかったが、63年の第2次P29遠征隊に学術調査メンバーとして参加。富山医薬大和漢薬研究所長のかたわら、チベット医学の支援や薬膳の普及に努められた。自宅は大阪府吹田市津雲台6の26の7。



真夜中のトリカブト

田村　俊秀

人との出会いに異なるものがあるとすれば、私の場合、そのひとつは難波恒雄先生との出会いでした。それまで縁もゆかりもなく、むしろ反対の極にいました。40年昔、私ども医学生は、草根木皮を処方するは迷信俗説、また非体育会系、ことに山岳部にあらざる者は軟弱の徒とみていました。

1963年、血気の赴くままP29遠征隊に志願したところ、隊長の故篠田軍治教授は、ただの登山にアカデミズムの衣をかぶせるべく、山岳部員とは一面識もない薬学部の難波助手を隊員にスカウトしたので、我々は大いに不満でした。

チベット国境に至るキャラバンの道すがら、難波先生は蛭にまみれながら、ただの雑草としか見えないものをせっせと摘み、キャンプ地に着くや、日本から持参した渋うちわで薪を燃やし、草の干物（押し葉標本）を大量に製造したのです。我々は変人と哀れみました。通常、登山隊の荷は進むにつれて減るのですが、干物のせいでかさばる一方でした。

めざす氷河の奥にベースキャンプを設けたあとのある昼下がり、難波先生と私は氷河の中で道に迷ってしまいました。そして、日が暮れて凍死も覚悟した深夜、先生が氷河の穴に転落したのです。

ランプを差し出し、引っ張り上げようとすると、先生は「ちょっと待て、ピッケルを貸せ」と、穴の底を掘り始めました。気でも狂ったかと怒鳴ったとき、「トリカブトの新種を見つけた」と喜色満面で這い上がって来たのです。先生の専門がトリカブトであることを、ヒマラヤの夜更けの氷河で初めて知りました。

麓のサマ部落は、マナスル隊以来、登山隊の拒否・妨害で悪名高く、我々は身構えていました。ところが、我々の登はん中、先生は村おさの家に居候をきめこみ、無邪気に村人と付き合い始めたのです。折しもチベットからの亡命者の一団が村はずれに住み着きました。僧侶、医師、学者などラサの上流階級で、サマの村人と険悪な状況にありました。先生はなんと、この両者に渡りをつけ、古文書、薬草、民具などをごっそり蒐集しました。居ながらにしてチベット民族の階級の両極に及ぶフィールドワークをものにしたのです。

富山医薬大和漢薬研究所に赴任するや、次々と探検、調査隊を繰り出して難波コレクションに至った執念は、40年昔の「真夜中のトリカブト」に源を発すると推察します。

こんな縁から私は、その後の難波隊に何度も潜り込みました。難波隊は酒とグルメに目がなく、フリーター、元青年海外協力隊員、チベット呪術師など、清濁併せ呑む構成でした。私一人が西洋医学の出とあって、キャンプの団らんでは東西医学優劣論の肴にされ、毎度、袋叩きでした。それが、いつの間にか洗脳され、いま、代替医療だの、医療文化人類学だの、聞いたような口をたたいているのは難波一派に負うところ大です。

難波先生は、度胸か、無邪気か、あわやの事態を涼しい顔で乗り切り、返す手でチャンスをつかむ、強運の人でした。師であり、よき友でもあった先生が先立たれるとは、いまだに信じられません。突然、「今、例の飲み屋にいるから出て来いよ」と、いつもの電話がかかってくるような気がしてなりません。

（1963年医学部卒）　合掌

編集後記

今号は、堺谷氏のタクラマカン砂漠、鷺沢氏のタスマニア島と海外の珍しい地域への紀行を掲載しました。山岳部で体得した冒険心を忘れず、どんどん海外に出かける高齢会員のお元気さに脱帽です。若い会員諸氏の投稿も待ちます。（会報担当・高田邦雄）